

1 ルネサンスと古典修辞学の伝統

Pocock(1975)や Hont & Ignatieff(1983)らによって提示された「富と徳」という思想史上の問題設定、すなわち古典共和主義の伝統に由来する徳による統治という理想と新興の富による新しい秩序の矛盾とその超克という問題はこの三十年来わが国内外において、とくにスコットランド啓蒙という枠組みのなかで盛んに研究され、多くの成果が残されてきた。しかし、こうした古典共和主義思想とそこに見られる「徳」論はイタリア・ルネサンス以来ヨーロッパ全体に広まっていった人文主義の一部でしかない。たとえば Tuck(1993)が説明する「新しい人文主義」やここで取り上げる古典修辞学の伝統などこれまであまり経済思想史という枠組みでは取り上げられることのなかったものも経済学がいかに生まれてきたかを知る上で少なからぬ意義があったように思われる。たとえば「新しい人文主義」はルネサンス期ヨーロッパを覆っていた懐疑主義を乗り越えるべく登場し、そこでは 'necessity', 'salus populi', 'reason of state', 'interest' といった言葉が用いられ、その思想はマキャヴェリをへてホッブズへと流れていったとされる。こうした議論は、Brewer(1990)の「財政 = 軍事国家テーゼ」との関連でこの時代の経済思想を考える場合、よりリアルな意味を持ってくるように思える。

しかし、以下で取り上げたいのはルネサンス後のヨーロッパにおける新しい知の形成とのかかわりで重要な意味をなすもうひとつの人文主義、つまり古典修辞学の伝統である。それはこの時期ヨーロッパにおいて復活しそしてつねに多くの、さまざまな分野の諸論者によって論じられ、あるいは少なくとも意識され続けていた。例えば初期近代において経済について語られた文献においてもさまざまな修辞技法が駆使されていたことはよく知られている。なかでも血液と貨幣といった自然体(body natural)と政治体(body politic)の比喩は多用されていた。しかし、当時の論者が修辞学をどう活用したかということと、古典古代以来の修辞学の伝統に対してどのような態度をとったのかということは区別して考えなければならない。例えば Walmsley(2004)は、ロックはその『人間悟性論』において修辞学そのものに対する批判を行っているものの、彼はバイコン主義者として一貫して「実験」という修辞学 (the rhetoric of experiment) を用いることによって言葉や理性にたよったそれまでの哲学を論駁しようとした、と指摘している。Skinner(1996)が示したホッブズの例はこの問題の複雑さをさらによく示している。Skinner によればホッブズは当時の人文主義教育における一般的素養として学んだ古典修辞学を、ガリレオから学んだ幾何学的方法に基づく彼の政治哲学の立場から厳しく批判したものの、『リヴァイアサン』に至って一般大衆への説得の必要を感じた彼は一転して修辞学を活用した。このように Skinner がホッブズを通して指摘する、自らの「哲学」の本質的要素としての反修辞学という立場

と、その「哲学」を広めるための修辞学の利用という矛盾は、この時代の「哲学」(経済思想の試みを含む)がなにを目指していたのかを知る上で重要な論点であるように思える。つまり、懐疑主義を乗り越えるためにもとめられた新しい「哲学」を広めるためには、本質的にはそれとは相容れない修辞学を用いなければならないというこの時代特有のジレンマを読み取らなければこの時代の論者が修辞学を用いるときの意図を正確に理解することはできない。この時代の経済思想に目を向けたとき、こうしたジレンマを理解することなく諸論者の修辞的表現に惑わされてしまうことは問題の本質を見誤ることになりかねない。

ルネサンス期における古典修辞学の伝統の復活と、それに対する 17 世紀ヨーロッパ、いわば初期啓蒙の時代の哲学・科学からのそれへの批判は、ホッブズのみならずこの時期の多くの論者にみられ、これらについてはとくに最近盛んに研究されている(Monfasani(1988)、Rhodes(1992)、Skinner(1996)、Vickers(1988))。そこにおいて共通する論点は、古典修辞学の伝統における哲学と修辞学のバランスの必要性、つまり一方での修辞学の有益性と他方でのその乱用に対する警戒であった。このような哲学と修辞学は常に互いを伴っていなければならないという意味でのキケロ主義は 17 世紀イングランドの知識人の間に広く行き渡っていた。しかしこれまでのところ、この時代に経済に関する諸問題を扱った論者たちがこの問題をどのように扱い、対処していったのかという点についてはほとんど論及されていないように思える。

以下では、まずこの哲学と修辞学の関係が初期近代イングランドにおいてどのようなになっていたのかについて整理し、その後で、この時代の社会・経済に関する新しい知識の獲得の試みである政治算術がこうした古典修辞学とその利用をめぐる思想史的状况の下でどのような展開を見せたのかを示して行きたい。

2 哲学と修辞学

『オックスフォード英語辞典(OED)』では、修辞学(rhetoric)は、「ことばを使って他者を説得、または影響を与えるための方法。話者または筆者が雄弁によって自己表現するために見いだされる諸規則」と定義されている。これは現代においてのみならず古代ギリシャ・ローマにおいても当てはまる。すなわち、それに批判的であろうが好意的であろうが彼らにとって修辞学は雄弁を用いた説得のための技術であった。

しかし、プラトンやイソクラテスによって批判されているように、修辞学はすでにその誕生のときから様々な議論をもたらしていた。プラトンはソフィストを批判するなかで、修辞学は哲学から区別されるべきであり、ソフィストのような雄弁家は真実を語らずただ聴衆を喜ばすことしか考えていない、と強調する。彼は修辞学は「お世辞(ギリシャ語では κολακεία。英語では flattery と訳される。)」と同じだとしてこれを退けるべきだとする。お世辞のそしりをうけながら修辞学は古典古代の人々によって強く批判されたが、しかし、これはそのまま修辞学それ自体が否定、もしくは拒否されたことを意味する

ものではなかったことに注意しなければならない。例えばVickers (1988)はプラトンが『ゴルギアス』でまさに修辞学を批判するために修辞学を十分に活用していたことを指摘する。むしろたいの古代の作家たちは修辞学を使うことに、しばしば条件付ではあったが、賛同していた。彼らは、修辞学自体が悪いとはいっておらず、それどころか哲学を伴った修辞学であればきわめて有用であることを繰り返している。

このように古典古代において確立された古典修辞学の伝統は大陸におけるルネサンスで復活した。こうした動きはイタリアから大陸を北上しイングランドにも浸透し、16世紀中頃から多くの修辞学関連の文献が出版されるようになり、また、修辞学は大学のみならずあらゆるイングランドの教育システムに深く定着していった(Skinner(1996)、part 1 参照)。しかし古代ギリシャ・ローマの場合と同じく、ルネサンス期イングランドでも修辞学が無条件に受け入れられたわけではない。Rhodes(1992)によると、16世紀中頃の古典修辞学の伝統の受容のあと、まず好意的に受け入れられ、広められ、擁護されたが、同じ世紀の最後の20年間は懐疑的にみられるようになった。実際、1577年にThe Garden of Eloquenceを刊行したピーチャム(Peacham)は、1593年同書的大幅な増補を伴う改訂版をだすが、ここでは、修辞学の各手法の説明すべてにその悪用に対する警告が付け足されている。

たしかに、この時期繰り返し唱えられたのは、哲学や知識は雄弁または修辞学なしには意味をなさないということであり、例えばパットナム(Puttenham)(1589)やシドニー(Sir P. Sydney)(1971)は、詩を讃えながら哲学に対する修辞学の優越を強調した。しかし他方では修辞学は常に哲学を伴う必要があることも繰り返された。そこでは哲学をいかに適切に教えるかを示すことが課題となり、修辞学は有用で不可欠ではあるが、その目的は聴衆に哲学を効果的かつ正確に伝えることであった。ピーチャム(1593)によれば英知と雄弁は一体となって初めて意味をなすのであり、最大の力を持つのである。いずれが欠けてもそれは不備をもたらす。Ciceronianusを書いたシドニーにとっても「キケロ主義者」とは「弁証法や知識を修辞学と、思想を言葉と結びつけるような人」(Harvey(1945), 83.)を意味した。

3 修辞学批判と政治算術

では、このようにルネサンス期に復活した古典修辞学の伝統は、同じ、あるいは接する時代に作り出された政治算術という経済・社会分析の方法にとってどのような意味があったのだろうか(政治算術の研究史、最近の研究動向については、伊藤(2002)、大倉(2003)参照)。自然体と政治体の比喻に代表されるペティの修辞表現についてはしばしば指摘され、あるいはその含意についてささ検討される一方で、そもそも修辞学というものについてペティがどのような考えを持っていたのかについてはあまり語られてはこなかった。ルネサンスによってよみがえった古典修辞学は、先ほどみたように新しい「哲学」を作るために

は否定されねばならないが、その「哲学」を広めるためには修辞学という手段はなくてはならないものであった。このような状況の中で政治算術がなにを意図していたのかを考えることは、初期近代における経済に関する新しい知への試みのあり方を探るためには十分意味があることのように思える。

では、政治算術という方法を作り出したペティはどのようにこの問題に対処したのだろうか。これまでの研究史においてベイコン、ベイコン主義者からの影響、継承と考えられていたものが果たしてそのまま表層だけで判断されていいのだろうか。こうした疑問に対してスプラット(Sprat)(1667)の『王立協会史(The History of the Royal Society)』がひとつのヒントになる。スプラットはこの本のなかで王立協会の目的と活動方針を示しているが、そこには複雑な政治的意図があったとしても、ベイコンの実験哲学をこの協会の基本精神とすることを宣言しているし、またそう理解されてきた。しかし彼が三編からなるこの著作のうち一編を使っているそれまでの哲学史への批判は、いわば上述の修辞学と哲学をめぐる論争そのもののなかに位置づけることができる。

スプラットが『王立協会史』第一編で展開した哲学史は、ベイコンによって確立された実験哲学を最良の知識獲得のための方法だとし、いわばそれへたどりつくまでの哲学の格闘の歴史として描かれている。スプラットはたしかにこの哲学史の中でベイコンの実験哲学の有用性、真実性を描こうとしてるがしかし同時に批判対象も明確にしていた。つまり論争好きの哲学である。Shapin & Shaffer(1985)が、なぜホップズが王立協会に入ることができなかったのかを示す中で、ジェントルマン社会において真実の形成は、それが正しいか否かではなくジェントルマン的な手続きをとったかどうかによることを示していたが、スプラットにとっても、この時代の知の形成において論争(disputing)、そしてその本質である雄弁(eloquence)もしくは話術(the Arts of Speaking)が王立協会そのものの存立にとってきわめて危険なものとして映ったことは容易に想像できる。この雄弁こそが古典修辞学の本質であり、これは言葉の濫用として当時しばしば批判されていたものでもあった。

このようにスプラットの批判の対象は論争という方法にあり、それは古典修辞学の基本的な要素である「話術」、「言葉の技巧」、「雄弁の装飾」への批判でもあった。しかし、修辞学への厳しい批判を展開していたホップズが『リヴァイアサン』のなかで修辞学を駆使したように、スプラットも修辞技法を駆使している。たとえば、ベイコンとモーゼの比喻は王立協会とベイコンの関係をうまく象徴的に示している。Vickers は、ロック、ホップズ、そしてスプラットの場合いずれにおいても「修辞学または隠喩を攻撃するものは例外なく修辞学と隠喩を使わなければならない」(Vickers(1988), 199)という皮肉を指摘しているが、Walmsley(2004)がロックについて、Skinner(1996)がホップズについて示したように、スプラットもそもそも彼自身の説を主張するに際して修辞学は不可欠のものであったということをこのモーゼとベイコンの比喻は語っている。

ペティもスプラットがその歴史を書いた王立協会の積極的な創立メンバーの一人であっ

たが、修辞学に対してはやはり二重の対応をした。つまり一方での古典修辞学に対する批判と、他方での修辞学の活用である。先にも触れたようにペティは政治体と自然体の比喻を多用するが、それはなによりも彼を政治算術家、McNally(1988)の言葉で言えば「社会的ベーコン主義者」としてわれわれの記憶に残すことになった著作のひとつ『アイルランドの政治的解剖』の序文において明確である。この著作のタイトル自体が修辞表現であり、そしてなによりも興味深いのは、この政治体と自然体の比喻を自らの方法のよりどころとするベーコンからひきついだとしている点である。

こうした修辞学の活用が彼の時代の知的環境のなかで共通に浸透していた古典修辞学教育の自然な発露であることは The Petty Papers(1927) や Petty-Southwell Correspondence(1928)を見ればより明らかとなる。例えば、‘ An Examination Paper ’ というタイトルの草稿 No.84 で 23 の項目が番号とともに列挙されてる(Petty(1927), vol.2, 8 参照)。これが何を意図して書かれたのかは記されていないが、この草稿が「教育」の分類にいれられていることから示されるように、当時の教育システムの問題を扱ったリストと考えることもできる。そしてここでは「雄弁と説得」も法学や記憶術とならんでひとつの項目をなしていた。‘ Of Churchmen, Physicians, Lawyers and Soldiers ’ というタイトルが付された草稿 No.135 では、牧師を聖職者、弁論家(Orator)、伝道者、司祭、司令官であるとし、とくにその弁論家としての役目を、「説得」であると考えている(Petty(1927), vol.2, 191)。「Fundamental Questions」と題された草稿 No.89 において、文字(letters)、発音(sounds)、名辞(names)についてのメモのなかでペティは、それらの要素から説話(speech)、記述(Writing)、印刷(Printing)、論理学(Logick)、修辞学(Rhetorick)を演繹的ともいえるやり方で説明し、修辞学を、「感情を高揚させ、信頼を請う説話をする」ためのものとしている。

このようにペティは修辞学を、相手を説得するための説話の術として理解しており、これは古典修辞学の定義でもあった。しかし、ペティも、スプラット、あるいはホップズと同様この技芸そのものについては批判的な態度を示している。それはたとえばサウスウェルとのやり取りのなかでも読み取れる。サウスウェルはペティへの手紙のなかで「記憶を改善するなんらかの技術(Art)を使ったことはありますか」(Petty(1928), 282)、とキケロの『雄弁について』を引き合いに出しながらたずねている。ペティはそれに対し三日後の手紙で次のように答えている。「人為的な記憶について。私は古代の雄弁家たち(the ancient orators)が事件、記事、文章、言葉に関して今日の誰よりもいい記憶を持っていたと信じている。私自身言葉についていくらかの記憶力があつた、つまり意味がなくて支離滅裂な言葉を五十ほどは覚えることができた。そしてそれらを容易に前から後ろからも繰り返せただけでなく、どれが三番目で、十九番目で、三十七番目かななどということも簡単にできた。それはまったく役に立つものではなくおろかな人々からの賞賛をうるだけであつた。」(Petty(1928), 283-4)ペティはこのように修辞学における記憶という術を通し

て、キケロという「古代の雄弁家」によって確立された修辞学が無益であることをうたえている。また別のサウスウェル宛の手紙の中で、ペティはパスカルの『幾何学的精神と繊細の精神の違い』(Petty(1928, 157)編者の解説を参照)についてつぎのように言及している。「そこには多くの言葉、句、文章があるが、それらには確かで実体のある意味(certain, sensible signification)はなにもない」(Petty(1928), 158)。パスカルは「多いか少ないかの原理(many or few principles)」をつかっているが、「『多い』とか『少ない』」というその言葉自体には何の実質的な違いもない。十という数が多いのか少ないのか、小さい数なのか大きい数なのか誰も言うことはできない。」(Petty(1928), 158)このパスカルの「多い少ない原理」への批判は『政治算術』の序文と同じことを意図していると思える。「私は、比較級や最上級のことばのみを用いたり、思弁的な議論をするかわりに、(私がずっと以前からねらい定めていた政治算術の一つの見本として、)自分のいわんとするところを数・量または尺度を用いて表現し、感覚にうたえる議論のみを用い、自然の中に実見しうる基礎をもつような諸原因のみを考察するというつづきをとったからであって、個々人のうつり気・意見・このみ・激情に左右されるような諸原因は、これを他の人たちが考察するのにまかせておくのである。」(Petty(1899b), 244. 訳 24.) この引用はベイコン主義的に読み取ることもできるし、実際そのように理解されてきた。しかしスプラットがベイコンの実験哲学推進の旗印として記した『王立協会史』がそうだったように、ここでもベイコン主義的主張の裏を支える修辞学批判も同時に意図されていたと考えられるのではないか。

参考文献

- Londsdowne, Marquis of, (ed.) (1928). The Petty-Southwell Correspondence 1676-1687, Constable & Co., London.
- Petty, W. (1899). The Economic Writings of Sir William Petty, ed. by C. Hull, Cambridge University Press, Cambridge.
- Petty, W. (1927). The Petty Papers, ed. by Marquis of Lansdowne, in 2 vols, London.
- Skinner, Q. (1996). Reason and Rhetoric in the Philosophy of Hobbes, Cambridge University Press.
- Sprat, T. (1667). The History of the Royal Society of London, for the improving of Natural Knowledge, London.
- Vickers, B. (1988). In Defence of Rhetoric, Oxford University Press, Oxford.
- Walmsley, P. (2003). Locke's Essay and the Rhetoric of Science, Bucknell University Press, Lewisburg.
- 伊藤誠一郎(2002)。「政治算術とホッブズの時代」『経済学史学会年報』第41号、pp.80-89.
- 大倉正雄(2003)。「ウィリアム・ペティの政治算術(1)」『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』6(2):23-48.